

第41回北海道麦作共励会審査報告

令和2年度の第41回北海道麦作共励会の出展者の麦づくりおよび審査結果の概要について審査委員を代表して報告申し上げます。

令和2年産の秋まき小麦は、10a当たり収量536kgで前年対比91%、平年対比では108%と上回りました。

春まき小麦では、10a当たり収量359kgで前年対比97%、平年対比では112%と上回りました。

全道の収穫量は、約62.5万トン、当初約53.5万トンの収穫量を見込んでいましたので計画対比117%の収穫となりました。作付面積は、約12.2万haで前年対比101%でした。

一方、品質面では秋まき小麦の1等麦比率が約95%となり、昨年に次ぐ高い割合となりました。また、基幹品種である「きたほなみ」の品質ランク区分では、子実タンパク含量率が基準値をやや上回ったものの他の項目はクリアできました。

春まき小麦では、播種作業は平年より早く、出芽も早かった。6月下旬の低温・寡照により一時生育が緩慢となりましたが、7月上・中旬の気温および日照時間は平年を上回ったことから、稈長、穂長、穂数とも平年並みとなりました。収量は、倒伏により低収となった圃場がみられたものの平年を上回り、品質では降雨の影響もなく1等麦比率で91%となりました。

秋まき小麦の収量が平年を上回った要因として、出穂以降の気温が全道的に高かったこと。また、日射量は道東を中心に低かったものの成熟期は平年並みとなり、登熟日数が44日と確保できました。さらにまた、5月の干ばつの影響もあり茎数が抑えられ止葉が立ち、受光態勢の良い草姿になったことなども挙げられます。

次に麦作共励会の経過について申し上げます。8月6日に第1回審査委員会を開き、8月24日付けで各関係機関・団体に、後援依頼と参加推進をお願いしました。

秋まき小麦では、全道的に平年を上回る作柄となり関係者の協力で7点の出展となりました。7点の内訳は、個人の部秋まき小麦第1部（秋まき小麦20ha以上）で1点。同第2部（秋まき小麦2～20ha未満）で3点。個人の部春まき小麦で1点。集団の部秋まき小麦で1点でした。

11月5日に第2回審査委員会を開き、推薦調書を基に審査を行い、部門毎の賞を選考し、12月3日までに現地調査を行い、正式に各賞を決定しました。

以下、最優秀賞者の麦づくりの概要について紹介します。

【個人の部秋まき小麦第1部】

音更町の五十川賢治氏は、畑作+野菜の複合経営を行っています。約188haの経営面積に小麦、大豆、小豆、ばれいしょ、人参、休閒緑肥を栽培しています。

令和2年産の小麦収量は10俵で、過去2年の平均でも10.7俵となっており、地区平均の1.2倍の安定した収量を確保しています。

等級は、全量1等Aランクと申し分のない小麦を生産しています。

安定生産を達成している麦づくりの要因として、伏流水対策で中音更地区の先駆的な取り組みとして地下3～4mに深層暗渠を施工し、その上に疎水材にビリ砂利を使用した普通暗渠により透・排水性を劇的に改善しました。また、小麦の前作として18%の休閒緑肥を作付し輪作体系を守っています。

さらにまた、自前の堆肥プラントにより牛糞と鶏糞を混合し、それによりんを添加し年間2,500tの堆肥を生産しています。ばれいしょへの影響の少ないタイミングで、8年輪作のサイクルで3t/10aを3回施用しています。この結果もあり、総窒素成分で通常の1/3の施肥量となっています。

【個人の部秋まき小麦第2部】

倶知安町の高山和男氏は、水田+畑作の複合経営を行っています。総作付面積が15.1haと地

域の平均に比べ大規模ではありませんが、きめ細かな作物生産に心がけ無駄のない経営を実践しています。

令和2年産の収量は11.7俵で、過去2年の平均でも11俵となっており、地区平均の1.4倍と高い収量を確保しています。等級は、全量1等Aランクと申し分のない小麦を生産しています。

安定生産を達成している麦づくりの要因として、6年の輪作体系をキッチリもっていることが上げられます。また、堆きゅう肥を入手しにくい地域であることから、父の代から草丈が高く乾物重の多い緑肥エン麦（モイワ）を自家採種しながら有機物の補給をしています。

また、倶知安町は積雪期間が長いことから、小麦の生育期間を確保するために融雪を早め目標の茎数と穂数の確保に努めています。

【個人の部春まき小麦】

美瑛町の佐藤仁昭氏は、耕地面積64haの畑作専業経営です。地域の中でも大規模で、春・秋まき小麦、直播てんさい、大豆、ばれいしょを栽培しています。

令和2年産の収量は、8.5俵と高く全道平均の1.4倍となりました。また、1～2等麦比率は約94%と高い結果となりました。

安定生産を達成している小麦づくりの要因として、初冬播きと春播きの二つの栽培方式を取っています。融雪の遅い北斜面では通常の春播きを適期に播種することは困難なため、収量の安定しやすい初冬播き栽培を行っています。

また、播種のタイミングには細心の注意をしています。播種適期であっても土壤乾燥が不十分な場合は、越冬率の低下が見込まれる場合には初冬播きを見送り、春播きに切り替えています。ちなみに令和3年産の春播き小麦は、全面積を初冬播きにしました。大規模経営であってもきめ細かな栽培管理を心がけています。

一方、土づくりでは、牛糞、バーク、鶏糞、豚ふんを原料とする堆肥を生産し、小麦後に4 t / 10aを目途に施用しています。

【集団の部秋まき小麦】

オホーツク網走23営農集団利用組合は、8戸で構成されています。経営面積は約202haで、内小麦面積は49haです。

令和2年産の収量は、約13俵で全道の平均を1.5倍と高く、過去2年間の平均収量も約13俵で、特に昨年は16.5俵と49集団のトップの実績でした。

また、品質面でも全量1等Aランクでした。

高収量となった要因としては、土づくりの一環として鶏糞8割に牛糞2割の堆きゅう肥を年間約2,300 t 製造し、3年毎に4 t / 10a ずつ40年間施用し続けていることがあります。また、ばれいしょでん粉排液を毎年全圃場にリールマシンを利用して2 t / 10a 施用しています。

さらにまた、土壤踏圧軽減対策として11月上旬にブルトーザの作業委託により心土破碎をしています。また、排水性が悪い圃場には計画的に暗渠を整備しています。

以上のように、それぞれ受賞された皆さんは、輪作体系を守り、透・排水性対策に腐心し、きめ細かな肥培管理に心がけています。

また受賞された皆さんは地域の仲間を大切に、地域のすばらしい牽引力となっています。これまでのご努力に敬意を表するとともに、この度の受賞を心からお祝い申し上げたいと思います。

最後に本年度の麦作共励会に関係された皆さんにお礼申し上げるとともに、今後とも北海道の麦作振興に尽力されることをご祈念し審査報告と致します。

第41回（令和2年度）北海道麦作共励会審査委員長
北海道農業研究センター作物開発研究領域長 杉山慶太